

日本小児科学会  
会員の皆様へ

### お詫びと訂正

日本小児科学会雑誌（第121巻 第2号 204-56）の分野別シンポジウム8・座長の言葉が、準備室の手違いで誤って古い原稿を掲載しておりました。新しい原稿に訂正するとともに深くお詫び申し上げます。

第120回日本小児科学会学術集会準備室  
日本コンベンションサービス株式会社

分野別シンポジウム8：こどもの薬：適正使用、安全性と、添付文書のはざ間で

座長の言葉

国立成育医療研究センター開発企画部

中村秀文

JA 静岡厚生連静岡厚生病院小児科

田中敏博

添付文書さえあれば、臨床現場で適切に薬が使えるとすれば、そんなに素晴らしいことはない。しかし実際には、添付文書だけでは現場の薬物治療に十分な情報を得ることは出来ず、教科書、薬用量ハンドブックや論文等を読んで、目の前の患者さんに対して最適の治療を行わざるを得ないことも多い。

小児に用いられる医薬品の場合、そもそも添付文書上に有効性や安全性に関するデータが充分でないものも多い。仮にデータがあったとしても、成長、発達の過程で、生体が様々に、そして劇的に変化する小児への投薬に際しては、すべての年齢・対象を網羅する情報では必ずしも無い。

それでも、医薬品は小児に投与される。小児における適応がない場合などは、例えてみれば、複雑な電化製品を、取扱説明書がないまま、あるいは空欄だらけの取扱説明書を眺めながら、見よう見まねで恐る恐る使ってみる、という状況に近いことすらある。さらに、多くの患者さんに使用された後にはじめて発見される重篤な副作用もあるが、現場の医師が注意して観察し、かつ報告していないと、見逃されてしまうこともある。臨床現場からの報告の積み重ねの結果が、添付文書の内容に反映され、内容がより良いものになっていく。

本シンポジウムでは、現在の添付文書の記載の限界と、こどもの薬に関して最近経験された実例を踏まえて、よりよい薬物治療のための展望を切り開いていく糸口としたい。